

「一夜白髪」のこころ

——白髪天神説話と北野の神詠——

小林 幸夫

(一) 北野天神と祈禱連歌説話

つぎにあげる『醒睡笑』（巻之四・聞えた批判）の二つの北野天神は、つねづね興味をもって読んできた。まずはこんな話から。

北野の神前にて、祈禱連歌あり。

かくなるものかさすらへの果

この神のかへり北野に跡垂れて

この付句、執筆かきとむると同じく、社頭震動し暫くやまざりつるは、神も大いに納受したまふにやと、人皆感じ申したるよし。

前句は、さすらいの旅の果ての、なにやら落魄のさまを思わせる。

付句は一転、前句を北野の神のことと取りなしてみせた。苦難のすえに、北野の神と祀られたというのである。「跡垂れて」とは、垂迹の訓読語で、仏が仮りに神の姿となって現れること。苦難をなめた果てに、神と顕れて人々を救いたまう。こんな連歌を北野の神はよろこばれたというのである。祈禱連歌とは、祈願の成就をねがう連歌であるが、それはまた神をよろこばし、慰める法楽連歌でもある。

もう一つは、巻の三「不文字」に収められるもの。これも祈禱連歌である。

この四十年ばかり以前、江州永原に祈禱連歌ありし。その日、京

「一夜白髪」のこころ

より永原へ行き、侍一人道の辺に石に腰かけやすむみぎり、杖つきたる白髪の老人、静かにあゆみよりて、いろいろのこと語り、「われはけさとくより先程まで、連歌のありつるを聞きてめたり。面白き句のありしよ。

おぼろおぼろに鐘ひびくなり

老いぬれば耳さへもとの我ならで

これに心なぐさみぬ」と、立ち行き給ふそのけしき常ならねば、侍も心ありげに、跡をしのび送りけるが、まがふべくもなき北野の神ならんと、沙汰しあへりき。

永原天神は、近江の豪族永原氏の尊崇を仰ぎ、宗祇・猪苗代兼載が出座した『永原千句』が巻かれたところである。「おぼろ」とは、はっきりしないさま。おぼろに響く鐘の音、付句はそれを、老いのゆえ、耳遠くなったさまにとりなした。衰老の天神のすがたとしたのである。そんな連歌に、「心なぐさみぬ」というのは、北野の神を慰める法楽ゆえである。さらに思いをいたすべきは、法楽連歌の席には、北野天神の絵像が掛けられることである。絵像を前に祈禱連歌がおこなわれる。出座する連衆は、天神の感應を期待したのである。

ここにあげたふたつの北野天神説話には、苦しむ神のすがたがあらわれている。苦難のすえに北野の神とあらわれる。「白髪」にその苦難は象徴されている。そんな北野の神を慰めるのが連歌である。神を

「一夜白髪」のころ

樂しませてこそ、その願いは納受されると信じられた。冒頭にあげた北野の祈禱連歌は、神前で催されている。それならば、この連歌説話は、発句を天神の神詠（神句）として、それに脇句を付けるという形に仕立てられているのではないか。辛酸をなめた天神が、北野に神と顯われなさるといって、たたえているのである。ここにあげた話を含めて、「白髪天神説話」とわたくしに称する連歌説話が、どのようにして生まれてくるのか、説話生成の場所に立ち会いながら、説話の性格について考えてみたい。

(一) 一夜白髪のころ——白髪天神説話

神はときに老翁にすがたを変えてあらわれる。それが説話の常套である。先の話でも天神は、「杖つきたる白髪の老人」として登場してくる。しかし、北野天神の場合、「白髪」には、特別の意味が与えられていたようである。たとえば『かさね草紙』の説話も、その一例である。

泉式部修行にとて下りけるに、美濃鏡のあたりにて白髪たる人出でて泉式部に向けるは、「若狭への道はどなたへ参候ぞ」と申ければ、泉式部とりあへず、

白髪をいだきながらわかさは死出の山路をとばとへかしとよみければ、老人返し

白雪をいただけこそとふぞかしわかさへ帰る道をしらねばとよみて、かき消す様に失にけり。泉式部きもをつぶしけると也。

老人は天神なり。

和泉式部と北野天神の歌問答である。和泉式部が肝をつぶすほどの歌でもないが、「若狭」と「若さ」の両義を用いながら、「白髪」に託して、衰老の嘆きを歌う。そうして老人は、天神であることが明かされる。「白髪」は天神のしるしとなっているのだ。

しかしなぜ「白髪」と北野天神が結びつくのか。この説話では、その消息は明らかにはならない。北野天神の「白髪」の由来をたずねてみると、たとえば『おようの尼』（奈良絵本）に、

北野の天神も、一夜に、白髪と、ならせ給ひ候。

というように、「白髪」は「一夜」と対のように用いられている。といっても天神が、なぜ一夜にして白髪となるのか。この一例だけではわからない。その疑問を明かしてくれるのは、やはり天神の縁起、『天神絵巻』（天理図書館蔵・室町末期）である。つぎの場面は、飛梅伝説にからめて、都を慕う天神のところが語られるところ。

程なく、二月二日に、なりしかは、のきはにうへし、紅梅も、今は匂ふらんと、おほしめし、都のかたへ、むかはせ給ひて、

こちふかは、匂ひをこせよ、梅の花、あるしなして、春をわするな

と、うちなかめさせ給ひければ、吹くる風、なにとなく、梅匂ふかと、おほゆる程に有りに、いと、都を、恋しくおほしめす所に、紅梅の、色うつくしく、さきそめたるか、根ながら、御まへにありしを、御らんすれば、宮古にうへ給ひし、梅なりけり、安楽寺へ、とひけるによりて、飛梅とは申候へ、あまりの御おもひにや、一夜白髪と、なり給ひしも、此時の御事とかや。

あまりに深い都への思慕ゆえに、天神の髪は、一夜にして白髪となる。無念の思いが「一夜白髪」に託されている。流罪の憂き目にあった天神の苦悩は、「一夜白髪」の一語に託して表現される。

さらに禅僧の詩にも「一夜白髪」は詠われる。相国寺の景徐周麟『翰林胡蘆集』（第十・「真贊」）に「一夜白髪天神」と題してのる。

万里鎮西君未帰 梅花遠逐海雲飛 三千丈髮一宵雪 肯信宮中脱御衣

太宰府にいて都を思う懐旧の情から、髪は一夜にして白髪となる。その思いの深さは、「白髪三千丈」のこたばをかさねて強調される。

巻頭に「真贋」とあることからすれば、この詩は天神図に付された詩画賛なのである。おそらく謫居する天神の絵像に添えられた詩なのであろう。

ひとつの歌語に、詩や歌のところが託される。歌語は韻文の世界では欠くことのできない肝要のことばである。連歌の寄合語もまた例外ではない。恵俊の『連歌寄合』（明応三年・一四九四）に「一夜白髪」のことばが見られる。

しろ髪に、「一夜と付くは、天神流されておはする道にて、都の事、我行末など思ひつゝけられて、一夜に御ぐし白妙成給ふを、一夜白髪と申也。

「寄合」とは、前句と付句とを関連づける特別な詞のこと。古歌のうちから選びぬかれた肝要の詞であり、歌語である。「白髪」とあれば、「一夜」と付ける。流罪の途上、都のこと、我が行く末を思い、憂慮のうちに一夜にして白髪となる。それを「一夜白髪」という。宗祇は『老のすさみ』（文明十一年・一四七九）にその付合の一例をあげている。

むまやのおさぞ髪しろくなる

春秋はほどなき夢の一夜にて 専順

是は、駅長勿驚時変改 一栄一落是春秋、といへる詩をとれり。かみしろくなるといへるに、夢の一夜と付侍る也。この詩は、聖廟の御作なれば、「一夜白髪」の心も、なにとなく其便侍るにや。

道真の漢詩を引きながら、落魄の情が「一夜白髪」の心」として説明される。「一夜」に「白髪」を付ける寄合は、『藻塩草』（巻十六・人事部「髪」）に、「一夜にしろくなる髪 是北野の神の御事也」と引かれ、『類船集』にも「白髪 天神」というふうに見えている。連歌の世界では、「一夜白髪」、あるいは「白髪」ということばで、流罪の身の憂愁や落魄の情があらわされたのである。

「一夜白髪」のころ

（三）『二根集』の北野天神歌

さきに示した北野天神説話が、どのような場で語られてきたのか、それができるかぎり想定してみたい。そこで『二根集』を資料として用いてみる。本書は伊勢神宮の神官荒木田守平の編になる連歌論書。文祿四（一五九五）年に、聞き書としてまとめられた。都の文化人や連歌師との交流、そのあいだに交わされた和歌や連歌の話題を書き留めている。第一巻は、三条西実澄（のちの実枝）、水無瀬兼成、細川藤孝（幽斎）、紹巴、孝精からの聞き書からなる。つぎに示すのは、天正五年（一五七七年）、摂津有馬にて、細川幽斎からの聞き書である。菅原道真の和歌が話題となっていたようで、「天神御歌」として三首、記してある。

一、冬は梅あざむく玉のひかりかな

天神御歌。新古今に、

はなと散玉とみえつあざむけば雪ふる里ぞ夢に見えける

あざむくは、あひする心。

一、天神、筑紫にての御詠

宵のまや都の空にすみぬらん心づくしのあり明の月

新古今

つくしにも紫生る野べはあれどなき名悲しむ人ぞ聞えぬ

むらさき生る野べはあれど、我ゆかりはなき、といふ心也。

ここに「新古今」とあるのは、『新古今和歌集』（巻第十八・雑歌下）に「菅贈太政大臣」として載る十二首のうちの二首。いずれも配所の地で帰洛の心を詠んだもの。「はなと散玉とみえつつ」の歌には「雪」「つくしにも紫生る」の歌には「野」の題がつけられている。『二根集』の聞き書は、有馬（湯山）湯治に赴いたおりの話題を書きとめたと考

「一夜白髪」のこころ

えられる。「天神、筑紫にての御詠」とあるように、流謫の地にあって、故郷に思いを寄せる道真。その無念の思いを詠む和歌が、話題となっていたのだらう。「冬は梅あざむく玉のひかりかな」という一句をめぐって、その本歌となる道真の和歌について話されたと思われる。

神宮神官荒木田守平と細川幽斎のあいだで、北野天神が話題となっていたように、伊勢神宮と北野の結びつきは思いの外深い。神宮連歌という行事がある。毎年、三度催される。荒木田守良『神宮典略』（巻十五「神宮連歌」）が、そのところを説明してくれる。

今の世神宮連歌とて、三度催されて絶る事なく、正権神主の執行ふ式あり。正月六日を若菜連歌と云、岩井田氏にて執行ふ。同二十五日を伊勢海と云、宿梅の発句あり。八月十五日を月見連歌と云。

年三回、正月六日を若菜連歌、同じく二十五日を伊勢海連歌、八月十五日を月見連歌として催される。いずれも神宮の神官が出席する神事の連歌である。正月二十五日は天神の縁日ゆえ、「梅」を発句としてはじまる。その詳細を中川経雅『経雅雜記』（神宮文庫蔵）に聞いてみよう。神宮長官の邸宅で行われるのが、伊勢海連歌である。

毎年正月二十五日、長官家里亭ニ而連歌興行。彌宜中已下、志有之候面々出座也。饗応之事有。式例件会を伊勢海の連歌と申伝へり。是、疑らくはあやまり唱るもの也。考に、詩連歌等之事ハ、菅原道真公を祖の如くする事、中世の流例也。仍、年始故、右の神へ奉納の心にて、連歌に志あるもの催したるか。二十五日は道真公の祭日忌日なり。又、此神靈、梅花を愛し給ふ事、古今申伝へたり。仍、梅の花の発句定例にて、年始の二十五日に興行と見えたり。

いつの頃から伊勢海連歌がおこなわれたのか、これだけでは詳らかではないが、菅原道真、北野の神の霊を慰めるために、神事として伝えられてきた。発句に梅を詠むことを定例とした法案の行事である。

こちらは外宮の例ではあるが、たとえば荒木田守武の『守武千句』にしても、

飛梅やかろくしくも神の春
われもくのからすうぐひす

というふうには、梅を発句として神宮の春をことほいでいる。飛梅の故事を踏まえながら、鳥や鶯までも神の後を慕って、飛んでゆくこと詠う。こうして北野天神は称えられる。守武が千句の草案に着手したのは、天文五年（一九三六）正月二十五日、天神の縁日である。このように連歌は、伊勢神宮の神を清しめる神事であった。連歌の神と仰がれた北野天神と伊勢神宮とのゆかりは、かように深い。

内宮神官荒木田守平と細川藤孝は、有馬の湯で、天神の和歌について語る（『二根集』）。少し想像をたくましくするならば、先ほどの「一夜白髪」の北野天神説話は、このような道真の歌を話題とする場からうまれてきたのではないか。たとえばここに『新古今和歌集』（巻第十八・雑歌下）の十二首のなかの一首を引いてみよう。流罪の地において、白髪の嘆きを詠む。

老いぬとて松は緑ぞまさりけるわが黒髪の雪の寒さに（松）

老松の緑とわが黒髪の白さをくらべながら、降る雪の寒さを歌う。そうして流謫の地にながら、都に思いをはせているのだ。北野天神の衰老の歎きは、すでにこういう和歌のうちに詠まれている。「一夜白髪」説話を育てたのは、先の『連歌寄合』の例で見たように、連歌の世界と考えられる。衰老の歎きをうたう和歌が詠まれるように、連歌の座では、「一夜白髪」の付合いに託して、落魄のところが詠まれたものと思われる。

（四）三輪明神の神詠—三輪清浄の寄合

天神の和歌を例にとっても、和歌と連歌の世界の結びつきはことの

ほか深い。和歌のことばから、連歌の寄合語はうまれてくる。それならば、北野天神の落魄・衰老をあらわす「白髪」説話が、連歌の座からどのようにして生まれるのか、天神の神詠を取りあげながら論じてみたい。

『二根集』巻二は、守兼・守武・守彦・尚重・尚織・尚興ら神宮神官の聞き書からなる。つぎに示すのは、岩井田尚重・尚織・尚興のあいだに交わされた歌話であろう。岩井田尚重は、内宮神官にして、若菜連歌を執りおこなう連歌の家・岩井田氏の出である。荒木田守武とも連歌の座を同じくしている。

一、かたつぶりさへつのおそろし

蝶の羽や重ねまほしき唐衣 長

天神御寄

三輪川の汀にあらふ唐衣をとると思ふなくると思はじ

此哥也。しうじやくおそろしきと云々。

角をふり立てるかたつむりを、付句は、執心の鬼と見立てたのだろう。あたかも謡曲『鉄輪』のようだ。この前句に、蝶が美しく羽を飾るように、もっと美しく着飾りたいとのぞむ女性のすがたが付けられた。美しく鮮かな蝶の羽に執心のかたちを見たのだろう。この付合いをめぐって、岩井田尚重らのあいだに、北野天神の神詠のことが話題にのぼったようだ。しかしこの「三輪川の汀にあらふ」の和歌は、天神ではなく、三輪明神の神詠である。岩井田尚重らの思い違いなのだろうか、その理由は、どうもよくわからない。ともかく『江談抄』に玄資僧都の説話が見えていて、そこにこの和歌が出てくる。

また云はく、「洛陽を去りて他国に赴く間、道に来会はせたる女人、衣を脱ぎて奉り侍りしに、歌に云はく、

三輪川の渚の清き唐衣くると思ふな得つと思はじ」

と。

他国へ赴く折、道に来合させた女人が、玄資に衣を奉った。そのと

「一夜白髪」のころ

きの玄資の歌である。これとは別に謡曲『三輪』にも類想の歌が見えている。

不思議なこれなる杉の二本を見れば、ありつる女人に与へつる衣の掛かりたるぞや「寄りて見れば衣の棲に金色の文字据われり 読みて見れば歌なり

三つの輪は 清く淨き唐衣 くると思ふな 取ると思はじ」ところがこちらは三輪明神の神詠となっている。玄資が里の女に与えた衣が、杉の木に掛かっており、その棲に歌が金色の文字で書かれていた。類想の歌といったが、やはり少し異なっている。「三輪川の渚の清き唐衣」と「三つの輪は 清く淨き唐衣」の二首を較べてみると、右から左へと写したものととても思えない。『三輪』が、『江談抄』にそのまま掲げられているわけではあるまい。

「三つの輪」とは、三輪明神の神木、松・杉・榊のこと。三輪山の靈神が、松・杉・榊の三種の靈木を結んで輪にしたものを、御神体としたことをいう。とすれば謡曲の神詠は、三輪流神道の教説によっていると思われる。

三輪流の教説がもっともよく反映しているのは禅竹の『明宿集』であろう。

玄資僧都ノイニシエ、三輪ノ明神受法受衣シマシマシテ、御神詠ニ

三輪川ノ清クモ淨キ唐衣呉ルト思フナ取ルト思ワジ

無所得ノ心ヲ表ワシ、三輪清淨ノ慈悲深重ノ御心ニテ、施スルモ施セラルルモ、皆自他ノ相ナク、無所得ナレバ、

こちらにも三輪明神が、玄資に受法受衣して詠んだ神詠である。玄資の受衣を、罪業救済のため、神から玄資への布施としたのである。禅竹は、この和歌を「三輪清淨」の法理を説くものと理解している。禅竹の理解が、三輪流神道の教理を受けていることは、『三輪流神道深秘抄』の一節を読んでも、およそ了解できるだろう。

三輪流神道灌頂ナドノ微妙不可思議可思シ之、通シテハ当社大明

「一夜白髪」のころ

神ノ御歌ニ

三ツノ輪ハ清クキヨキソ唐衣、クルト思フナトルト思ハジト、神慮ノ明慮ヲ知ラン事イカン、答、コノウタ擅波羅密ノ義ヲヨマセ玉フ御歌也、施ス人ノ心モ清ク、受クル人ノ心モキヨケレハ、施物モ清クナル、是ヲ三ツノ輪ハキヨク清キソト、ツラネ玉フ、カラ衣トハ施物、クルト思フナトルト思ハジ主ノ方、トルト思ハジハ受ル人ノカタ也、法全記ナドニテ見ルベシ、是即菩薩ノ六度ノ中、布施ノ行ニテ、三輪清浄ノ御歌也、

本書は、三輪流神道に関する伝書で、三輪流が「他家ノ神道ニ異ナル義多シ」として、「無二無双ノ御神」たる所以を説く。三輪の神の「受法受衣」から「三輪清浄」の法理を説くにいたる。「三の輪」、つまり三輪の霊神の清浄なるころ、その「慈悲深重」なることを説いてやまない。

いまここに、三輪明神の神詠をとりあげたのは、ほかでもない。三輪の神詠について考えるため、テキストの性格が異なることを承知で、和歌をならべて示してみたのである。三輪明神の神詠として伝えられた和歌を、岩井田尚重ら神宮の神官が、なぜ北野天神の神歌としたのか。守平の誤記とも思えない。だがそのいきさつはいまのところ不明である。しかし、神詠を本歌として、寄合語がうまれ、連歌が付けられる。今、そのことを確かめておきたい。つぎのは『連歌寄合』から引いた『老葉』(雑下)の付合である。

きよきに、三輪を付。三輪清浄の心也。三輪とは、身・口・意也。

きよき人にぞ神はやどれる

蔭高き杉こそ社三輪の山

祇

(老葉、雑下)

三輪河清き流とおほくよめり

「清き」に「三輪」を付ける。この連歌寄合が、三輪明神の神詠を本歌としているのは明らかだろう。「三輪とは、身・口・意也」という。いま『日吉山王新記』(「神道肝要集」)を借りて、その意味を確

かめてみると、

山家云、天地開ケシ初メ三輪ノ神現ズ。三輪トハ身口意ノ三業也。心正ヲ則ンバ(※心正シケレバ則チ)、三業自ラ正シ。所謂三輪清浄也矣

ということになる。「心正ヲ則ンバ」(意味が通じないので、いまかりに「心正シケレバ則チ」と読んでおく)、「身口意ノ三業」、身も心も、そしてことばも、おのずから正しい。それが「三輪清浄」のころだという。三輪の神木、杉・松・榊の「三つの輪」は、そのシンボルといつてもいい。その「三輪清浄のころ」をもって、連歌寄合がつくられ、句は付けられる。つまり、三輪の神詠から、連歌の「寄合」が生まれてくる。

『二根集』の聞き書にたち戻れば、岩井田尚重ら神宮神官は、「かたつぶりさへつのおそろし」の連歌を話題としながら、三輪明神の神詠について語りあっていたのだろう。それがなぜ北野天神の神詠とされたのか、その事情はわからない。しかし、神と顕われた北野の神は、「三輪清浄」、心・口・意ともに、清らかなることが、尚重らのあいだで話題となっていたのではないか。ともかく「三輪清浄」の連歌は、神詠と深くつながっていることはわかった。寄合語を介して、神詠の話題へとひろがってゆく。それが連歌の一座であった。

(五)「宵の間や」の神詠

もう一首、『二根集』巻一に北野天神の和歌がある。やはり摂津有馬の湯での、細川幽齋からの聞き書である。これも「天神、筑紫にての御詠」という詞書がある。

宵のまや都の空にすみぬらん心づくしのあり明の月
筑紫の謫居にいて、都に思いを馳せる歌である。しかし、これは菅原道真の実作ではない。伝承歌である。天神の神詠百首をあつめた

『菅家百首』(文久三年・東北大学狩野文庫蔵)に、この一首は収められている。『菅家百首』は、別に「瑠璃壺百首御和歌」とも名づけられている。「瑠璃壺」という不思議な名には来歴がある。『瑠璃壺之御詠歌百首』(『天神御独吟』内・東北大学狩野文庫)にその名の由来が述べられている。本書の奥書に「寛治二年(一〇八八)二月廿五日」とあるが、室町初期の成立と考えられる。

瑠璃壺之御詠歌百首ハ菅公政事ノ余暇興詠吟嘯シテ自ラ的物ノ草稿ヲ取テ瑠璃器ニ納ム。昌泰年中左遷ノ時又一器ヲ携エテ筑石ニ下ル。見ルニ隨ヒ興已ニ聴触ルルヲ作シテ自生ノ和歌百首ヲ感ジテ改テ以テ壺中ニ入ル。聖化上天ノ後度会神主飛鳥春彦故有テ瑠璃壺ヲ給フ

春彦ハ飛鳥冬綿同胞ノ弟、度会大神主高主ノ子、白大夫是也。つまりこの一首は、天神の神詠だといふのである。天神と顕われてのち、この瑠璃壺に入れた百首の和歌を、白大夫・度会春彦に与えたといふのである。なかなかおもしろいが、しかし、これもまた神詠をめぐると天神伝説であり、白大夫伝説のひとつである。つまり北野天神の神詠をめぐってうまれた説話伝承と考えていい。

「宵のまや」の神詠をめぐると説話は、つぎにあげる『菅家瑞応録』(菅家文庫蔵)にも引きつがれている。大阪天満天神社蔵『菅家瑞応録』は、年代の知れる最初の写本(真名本・大本一冊・宝暦十年写)である。中村幸彦氏によれば、「元来天台宗の色彩をおびていた「天神縁起」に、観音信仰が加味されて、神仏の講釈説法に利用されつつ増加して発達したのが、『瑞応録』であつたと思われる」といふ。この神道講釈に「宵の間や」の和歌がはさまこまれている。

夜已ニ更テ果、月輝キ、夜ハ明レトモ、尚ハ天ニ掛リケルヲ眺メ玉フ、

宵ノ間ヤ都ノ空ニ住ヌラン心ツクシノ有明ノ月

ト詠シ玉フ、是菅公和歌ノ終ニシテ、菅公忠臣ノ道ヲ誦セラレケ

「一夜白髪」のこころ

ル、扱公ノ御不食次第ニ重ク成リマサラセ玉ヒテ、二月廿三日春彦ニ示シテ曰、吾疾病ナリ、速ニ尊容ヲ迎ヘヨ、春彦即大悲合體ノ像ヲ机ノ上ニ安ス、公ノ曰、吾死シテ後、此尊容ヲ捧持シテ諸国ヲ遊行スヘシ、必一処ニ止ルコト無レ

これは道真の「忠臣の道」を詠んだ歌だといふ。流涕の地で病に臥した道真は、都の空に掛かる月を眺めた頃を思い浮かべていた。帝のそばで、心を尽くして仕えた頃のこと。遠く都を思う歌である。死の床にいて、十一面観音の尊像を手ずから刻んだ道真は、「この大悲合體の尊像を捧持して諸国を遊行せよ」と白大夫に言い残す。その歌は月を眺めて、故郷、都を思いやった絶唱である。白大夫に形見が託されるという点で、『瑠璃壺之御詠歌百首』と『菅家瑞応録』は、いみじくも一致する。瑠璃壺と十一面観音像、これが形見として白大夫に託される。伝説ではあるが、白大夫は、道真と辛苦をともにして、筑紫まで下ってきた主従である。形見を託されるにふさわしい人物である。

ここでもう少し白大夫について考えてみたい。天神から形見の和歌を授けられるだけではない。かれは北野の神前に奉納された連歌や俳諧を「金ノ衣械」に拾い集めて神殿に納めたという。文明十四年(一四八二)成立とされる『塵荊鈔』(巻五「連歌之事 同天満天神事」)に、その伝承は記録されている。

連歌ニ又十体ト云、六義ノ蘊興(奥)ト云、筆墨ニ尽シ難シ。縦又式目ヲ守、発句ヲ定メ、賦物ヲ取事無巢ドモ、何モノ地連歌、又ハ一句二句ノ云棄ヲモスベキ也。凡一折ノ連歌マデモ其懷紙、北野ノ御宝殿ニ現出スル也。或当座逸興ノ云棄、亦狂言綺語ノ誹諧マデ、庭中白大夫殿ノ役トシテ、銀ノ著(箸)ヲ以金ノ衣械ニ拾集、神殿ニ収玉ナル、此旨儘ニ御託宣ニ出タリ。況百韵千句一万句等ノ潤色ヲヤ。

たとえ言い捨ての連歌や俳諧であれ、白大夫は、それを「金ノ衣械」

「一夜白髪」のころろ

に拾ひ集めて、神殿に奉納したという。この行為にどういう意味があるのか。おそらく、連歌や俳諧が、北野の神を慰める法案のわざとなるということだろう。たとえ言い捨ての俳諧といえども、天神はそれを喜んで納受されるのだ。

白大夫といえ、伊勢や北野の御師である。かれらは、歌人や連歌師でもあった。和歌や連歌で神を慰めた。かれらの奉納する和歌や連歌は、神を悦ばせる神供でもあった。伊勢の御師でもあった岩井田尚重は、おそらく天神の神詠について、細川幽斎らと語っていたのだろう。『二根集』が、『天神御歌』、『天神、筑紫にての御詠』と記すのも、道真の歌というよりも、天神の神詠とみなしていたのだろう、そこには神に仕える御師のころろがはたらいにちがいない。連歌の神、北野天神を尊崇する敬神のころろである。

(六)「隠らくの泊瀬」の神詠

荒木田守平が『二根集』に書き留めた天神歌は、神詠である。「宵の間や」の伝承歌がそうであったように、「三輪清浄」の三輪明神の神詠も、天神の神詠として記録された。そうだとすれば、伊勢と北野をつなぐものは何か。もちろん一つは連歌である。そしてもう一つは、十一面観音信仰である。伊勢神宮と北野天神は、ともに十一面観音の垂迹である。『北野神記』は「当社御本地事」として、

当社ヲバ伊勢天照太神最後ノ化身ト習也、伊勢当社共二十一面ノ垂迹也、

と記している。もちろんこれは北野の側の主張である。前に述べた『菅家瑞応録』に戻れば、白大夫は、道真の形見、「大悲合体の尊像」を持って諸国を遊行する。そしてこの十一面観音像は、のちに朝日寺（北野東向観音）に納まることとなる。この朝日寺は、北野の神宮寺であり、十一面観音を本尊とする。朝日寺の来歴については、『菅神

初瀬影向記（室町期）に詳しい。

村上天皇朝。僧最珍有り。神人靈夢を得て。筑紫より来たりて長谷寺に詣つ。観音堂有り。持念すること七日七夜。親しく生身の大悲菩薩を拝み瞻んと欲して。七日期満つる時。宝殿の中より声有り。倭歌を詠じて曰く。

かくらくの初瀬の寺の仏こそ北野の神とあらはれにけり

菅神の本地十一面観音たり。已に京師右近の馬場に至りて。七条文字と力を勤はせて。北野に神祠を造り。側に草堂を卓てて居す。扁して朝日寺と号す。（原漢文）

北野の本地仏は、右近の馬場・朝日寺に祀られた。僧最珍の夢に現れて託宣したのは、初瀬の十一面観音である。「かくらくの初瀬の寺」の和歌は、本地垂迹の関係を語る神詠でもある。『瑠璃壺之御詠歌百首』（『天神御独吟』内・東北大学狩野文庫）の識語に、

かくらくのはつせの寺のほとけこそ北野の神とあらわれにけりの和歌が記されている。もちろん北野の神詠であり、初瀬の仏が、北野の神とあらわれたことをいう。さらに『醒睡笑』（巻之一・謂へば謂はるる物の由来）にも、

ある人、北野に籠りて本地を祈りければ、

隠らくの泊瀬の寺の仏こそ北野の神とあらはれにけるとある。こちらは、北野の神が託宣して、みずからの本地を歌にして告げたのである。ほんの少しことばを変えた歌を、『竹林集聞書』（室町後期）が伝えている。

初瀬にますはよきの神垣

迷てや我世をあしく祈らん（竹林抄）

初瀬によきの宮まします也、よき云名のあるに我よあしく祈と也、よきの宮天神也

もろこしの初瀬の山の仏こそ北野の神とあらはれにけり

『竹林抄』の注釈に、天神の神詠が引かれてくる。「よき」は、与

喜天神社のこと。もちろん北野の神を祀る。長谷寺の十一面観音は、北野の神と顕れなされた。この注釈も、本地垂迹のことを語っている。北野の本地を語るとき、この神詠が引かれてくる。連歌では、「もちこし」と「泊瀬」は寄合である（『連歌寄合』）。連歌の座におれば、北野の神詠のことが、話題となる折もあっただろう。なにしろ室町期は、連歌の時代、天神の御代である。連歌は本地垂迹思想と結びついて、天神の法衆が強調されてゆく。『連通抄』（応永二十年・一四一三年以前に成る）は、そんな連歌の時代を、つぎのように述べている。

今は天神の御代なり、其謂いかにといへば、むかしは靈山会浄にして法を説、今は又西方極楽世界の教主にて、極悪最下の罪人をも捨じとの方便也、濁世には観世音と顕て善惡人共に物給ふ願有、就中十一面観音と顕て、下品の衆生をもらさで導引給ふ也、今の世の北野天神にて御座、ありがたき御事をや、近比より連歌の道をたて、愚なるをも此道に入んとの方便也

十一面観世音菩薩は、濁世塵土に示現して、北野天神と顕われ、連歌の道をたてて人々をみちびき給う。そんなふうには連歌の功德が讃歎され、天神が讃えられる。「もちこしの初瀬の山の仏こそ」という神詠も、十一面観音の垂迹たる北野の神をたたえる歌なのである。そんな天神の神詠が、連歌の座の話題となったことはいうまでもなからう。荒木田守平が天神の神詠を記録したことを思えばいい。

『経覚私要抄』は、興福寺別当経覚が、『連歌新式』を五月十八日に書き終えたことを記す。折しも五月十八日、観音の縁日である。

長谷ノ新式。今日書シ終ハハヌ。老体ナレバ。以テノ外ノ大儀也。然シテ法衆ノ事。神ヲ敬フノ身ナレバ。一山論議申スノ間。老屈ヲ顧ミズ沙汰シ遣リ了ハハヌ。奥書ニ云ク。此新式ノ事。満山所望タルノ由。執行弘辨ニ伝ヘ申シ給フノ間。不堪ト云ヒ老眼ト云ヒ。仔細有ベシト雖モ。且ツハ鎮守聖廟ノ冥瞻ヲ恐レ。且ツハ大聖渴仰ノ老心ヲ励シ書キ了ハハヌ。

「一夜白髪」のころ

まさに泣かんばかりの体である。長谷寺では、この『連歌新式』を掛けて、聖廟法衆の連歌会を執りおこなったのである。まさにこういう法衆連歌の会では、天神の絵像や名号が掛けられて、天神の徳、連歌の徳を称えたものと考えられる。そこで天神の神詠が話題となれば、「白髪天神」説話のことも話にのぼったであろう。それならば落魄・衰老の果てに神と顕われる白髪天神説話は、天神をなぐさめるかっこの法衆の話題となっただろう。

本地十一面観音が、北野天神と跡を垂れ、連歌の道を立て給う。こうして天神を讃え、連歌の道を言挙げすることが、法衆であった。その天神の苦難を表現するのが、「一夜白髪」という言葉であった。天神の苦難を、連歌の世界は、「一夜白髪」ということばで表現してきた。その連歌の世界から生まれたのが、一夜白髪天神説話である。

(注)

- (1) 宗牧『当風連歌秘事』には「夢想・法衆には絵像の神を掛くべし」とある。
- (2) 岡見正雄「室町ころ」（『室町ころー面白の花の都や』一九九六年二月）
- (3) 『俳文学大辞典』（二根集）の奥野純一氏の解説。
- (4) 奥野純一氏『伊勢神宮神官連歌の研究』（一九七五年三月）
- (5) 拙稿「伊勢の西行説話―西行思慕のかたち―」（『伝承文学研究』五十六号）二〇〇七年五月。奥野氏注（4）論考参照。
- (6) 宮家準氏「神道と修験道―民俗宗教思想の展開―」（第二節「三輪山の信仰と三輪流神道」）二〇〇七年十一月
- (7) 小田幸子氏「作品研究 三輪」（『観世』一九八一年九月）
- (8) 神道大系神社編・十二「大神・石上」解題（一九八九年）。

「一夜白髪」のころ

(9) 『仏教大辞彙』(龍谷大学編・大正五年)は「三輪清浄偈」について次のように解説する。「施者・受者・施物は共に染著を離れて清浄なるべきことを示せる偈頌。即ち「能施所施及施物、於三界中不可得、我等安住最勝心、供養十方諸如来」の四句偈是れなり。布施を受ける時に之を誦す。」

(10) 『瑠璃壺之御詠歌百首』の奥書には、「寛治二年(一〇八八)二月廿五日 大藏卿為長」とある。宝鏡寺蔵『妙法天神経解釈 全注釈と研究』(小峯和明編・二〇〇一年七月)は、「これは偽託の書。為長は、道真の直系の子孫。『瑠璃壺之御詠歌百首』は、室町初期の成立か」と解説している(総説編第3章『妙法天神経』の和歌)安原真琴・渡辺麻里子。

(11) 中村幸彦「白太夫考―天神縁起外伝」『中村幸彦著述集』第十巻・一九八五年

(12) 山本五月「天神と童子―中世天神信仰の物語と図像―」(『中世文学』第五十号)二〇〇五年六月